

伊藤若冲筆「仙人掌群鶏図」の仙人掌モチーフにおける博物学的知識の影響について  
齋藤優穂（京都大学）

大阪・西福寺が所蔵する伊藤若冲筆「仙人掌群鶏図」（襖六面、紙本金地著色、以下、本作とする）は、仙人掌と奇岩、鶏と雛を描いた若冲晩年の作品である。本作を発見した石崎光瑤氏が伝える寺伝によると、依頼主は大阪鰻谷で菓種問屋を営み富を築いた有力商人で、西福寺の檀家であった吉野五運であったという。本作には「斗米菴米斗翁行年七十五歳画」と行年書があり、天明八（一七八八）年に天明の大火によって家やアトリエを失った若冲が大阪に身を寄せた際に描かれたものと推定されている。本作に描かれる仙人掌という珍しいモチーフについて、先行研究では、若冲、吉野五運、仙人掌が「奇」なるものとして結びつくことが指摘されるほか、菓種問屋である吉野家の繁栄を祈願するものとして説明されてきた。本発表では、十八世紀の日本における博物学的観点と当時の西福寺、若冲、吉野五運の置かれた状況から、本作における仙人掌というモチーフの選択に対してより積極的な意味を認める。

十七世紀から十八世紀にかけて、本草学や物産学、名物学などの興隆によって、人々の興味と好奇心のもとに出版された和漢の書物、特に本草書や園芸書、地理書ではさまざまな形で仙人掌が紹介されている。中でも、清の陳淏子撰『花鏡』、呉震方撰『嶺南雜記』、屈大均撰『広東新語』において、仙人掌に関してそれぞれ「可鎮火災」、「辟火災」、「此艸可以辟火」と述べている点に注目する。ここから、天明の大火直後の若冲が他ならぬ仙人掌を描いたことに、仙人掌の火災を鎮めたり、避けたりする効果が関係している可能性を提示する。次に、若冲や注文主の吉野五運が『花鏡』などの知識を知り得たかという点に関して、大坂における知識人が交流するサロンの中心人物であった木村兼葭堂を挙げて考察する。兼葭堂はその来客記録である『兼葭堂日記』から若冲、吉野五運の両者と接点があったことが知られるとともに、『兼葭堂書目』と『昌平書目』より旧蔵書の一部が明らかな人物で、当時の彼らが『花鏡』や『嶺南雜記』、『広東新語』の知識に極めて近しく接し得る環境にあったことを示す。最後に、注文主であった吉野五運と西福寺には、正徳二（一七一二）年の西福寺の本堂焼失という火災の経験があったことを確認する。

本発表では、以上の考察を踏まえ、本作における仙人掌について珍奇な植物としての側面に加えて、当時の博物学的知識の影響がある可能性を指摘する。